

平成 21 年度大阪大学入学式 総長告辞

まず、本日ここに集われた 3427 名の学部生、2931 名の大学院生のみなさん、入学ならびに進学おめでとうございます。また、ご臨席いただいたご家族のみなさまにも心よりお祝い申し上げます。

みなさんはこれまでずっと勉学に励み、難関を突破して、晴れて今日、この大阪大学に入学されました。そして今、大学ではこれをやりたい、あれもやりたいと、大きく胸を膨らませていらっしゃることでしょう。けれども、そうした「やりたい」ことは大学にいるあいだに変わってしまうかもしれません。いや、どんどん変わっていけばいいのです。これがほんとうに自分がしたいことかどうかは、やってみなければ分からないからです。

この世界を見るわたしたちの視野というのはけっして広くありません。いつもここから、自分の立っている場所からしか、見られないという限界がまずあります。次に、自分が習ってきた知識や習慣の枠のなかでしか見られないという限界があります。加えてさらに、自分がなじんでいる言語のなかでしか考えられないという限界もあります。こういう世界は、リアルと言うにはまだまだ小さいものです。世界を的確に掴むには、そしてそこからさらに大きな夢を見るためには、だから、この小さな世界をもっと大きく広げていかななくてはなりません。

学問というのはそのためにあります。世界についての視野を広げていくのです。視野を広げるといえるのは、すでに知っている知識を量的に拡大するというものではありません。そうではなくて、これまでそんなものがあることさえ知らなかった「ものの見方、問い方、考え方」にふれるということなのです。

そのために、まず、「分からないものの大切さ」ということについてお話ししたいと思えます。

わたしたちにとってなによりも重要なことは、自分以外の人びととどのように関係しながら生きるかということです。自分以外の人びとは、生まれたときから頼りあって暮らしている身近な人はもちろん、まだ会ったこともない地球上のさまざまな人びとでもあります。

そうした人びととのかかわりの平面はしかし、わたしたちにとってごく限られています。地球上で起こっているさまざまな出来事について、わたしたちは多くの場合、新聞やテレビの報道で知ります。まるで観客のようにしてそれにふれます。その人たちの運命と自分のそれとはあまりに遠く隔たっていて、それらが自分の毎日の生活とどうつながっているのかは、相当な知識と想像力がなければ理解できません。他方、毎日の生活のなかで絶対なおざりにできないのは、同僚や友だち、あるいは家族との関係です。ここでは相手の一言一言に深く傷ついたり、落ち込んだり、逆につよく励まされたりしています。

ここから抜け落ちているのは、よく〈中間世界〉と呼ばれているものです。自治体の市民としての生活、地域住民としての生活です。いいかえると、ふだんの生活の具体的な文脈となっている世界であり、ともに社会を動かす主体でありながらたがいに未知であるような人たちとのかかわりです。それこそ政治や経済が具体的に働きだしている世界です。

ところがそのような世界の仕組みは、さまざまな要因が複雑に絡まっていて、容易に見通せるものではありません、むしろわたしたちの現実は分からないものばかりで編まれていると言ってもいいほどです。

少し具体的にお話ししましょう。

たとえば政治、それは外交をとっても国内行政をとっても、不確定な要素に満ちています。政治は、状況が刻々と変わるなかで、きちんとした見通しもつかないまましかも即刻なんらかの決定をしなければならない、そんな判断が求められる世界です。すぐにも実行しなければならない施策が二つA、Bとあっても、Aを先にやるかBを先にやるかによって、ABそれぞれの施策の意味も実効性も大きく変わってしまいます。そんな不確定な状況のなかで間を置かずもろもろの決定をしなければならないのが、政治的な判断というものです。

次に、場面を変えて、介護や看護といったケアのいとなみについて考えてみましょう。ケアの現場では、ケアを受ける当事者とその家族、さらにはケアに携わるひとや介護スタッフ、医師や施設の管理運営を預かる者というふうに、それぞれの立場で判断はときに微妙に、ときに大きく異なります。そういう対立した思いが錯綜するなかで、いいかえると、だれの思いを通してもだれかに割り切れなさが残るそういう現場のなかで、それでもこの場合に何がいちばんいいケアなのかを考え、ケアの方針を立てねばなりません。ここでは、正解のないところでそれでも一つの解を選び取る、そういう思考が求められます。

さらに場面を変えて、芸術制作の現場を考えてみます。制作者は自分が何を表現したいのか、自分でもよく分かっていません。はじめは、表現しなければならないという衝動だけがあるだけです。けれどもできあがった作品は、美術の場合ならここにはこの線、この色、音楽の場合ならここにはこの音、この和音しかありえないといった、必然性が隅々まで行き渡っています。ここでは、曖昧な事を割り切るのではなく、曖昧な感情を曖昧なまま正確に表現することが求められているわけです。

このように不確定なこと、分からないことが充満する世界、正解のない世界のなかで重要なことは、すぐには分からない問題を手持ちの分かっている図式や枠に当てはめて分かった気にならないことです。分かっていることよりも分かっていないことをきちんと知ること、分からないけれどこれは大事ということを知ることが重要なのです。そしてそのうえで、分からないものに分からないまま的確に対応する術を磨いてゆかなければなりません。

じつは、みなさんが入ってこられた大学というところも、そのためにあります。大学では、これまで知りたいと思ってきたことを知るだけでなく、そんな問いが存在することを夢にだに思わなかった問いにふれること、これまでそんなものがあることさえ知らなかった「ものの見方、問い方、考え方」にふれることが何よりも大事なのです。

大学にはみなさんがおそらくはまだ知らないさまざまな知識が膨大に蓄積されています。宇宙についての、自然についての、社会や文化、そしてそれらの歴史についての知識です。その大学で、過去の思想ともう一度対話しなおしたり、自分とは異質な他者のものの見方、感じ方に学んだりしながら、自分の世界を広げてゆくこと、そしてこれまで当たり前のように見てきた世界をもっと別な視点から捉えなおすことで、世界を広げてゆくことが大学での勉学ではもっとも重要なことなのです。

そのために何をおいても鍛えておく必要があるのが、イメージーション、つまり想像力というものです。イメージーションというのは、ここにはないもの、自分がよく知らないもの、これまで考えも及ばなかったものを想像する力のことです。

想像力という、よく論理的な思考力と対比されます。感性的か、それとも知性的か、というふうにはです。けれどもそのいずれも、いまここにはないもの、不在のものへと向かう心の動きとしてはひとしいものです。想像はファンタジー、つまり空想や夢想とおなじではありません。眼の前にあるものを手がかりとして、眼の前に現れていない出来事や過程を想像すること、あるいはそれを論理的に突きつめてゆくこと、そういう不在のものへの心のたなびきこそが、ここでいう想像力のはたらきなのです。その意味では、科学にも政治にも、あるいは芸術や（他人への）思いやりにも、いきいきとした想像の力が不可欠だと言えます。が、いまの大学での研究を見ていると、そういう心のたなびきがだんだん短くなってきているような気がしてなりません。

科学研究をしているときに、たしかにまだ見えていないものに心をくだきます。けれども、その見えていないことは、多くのばあい、特定の理論の枠組みのなかで未知のことにすぎないことが多いものです。たしかに未開拓の問題領域には敏感ですが、しかしその未知のことからは、そういう理論の枠組みゆえに、あるいは枠組みのなかで、未知であるにすぎません。偉大な科学的発見というものは、その研究が立脚している枠組みというものをしばしば根底から揺るがし、それを無効にしてしまいます。ということは、既存の枠組みのなかでは問題としてすら見えにくいこと、枠組みのなかであまり価値を認められていない現象に対する感受性のほうが、科学研究においてはむしろ大切だということになります。同じ枠のなかでのゲームや競争に埋没しては、ほんとうの科学革命につながるようすばらしい研究は生まれないのです。

大学においてそのような学問研究に携わることは、じつは、一市民として他の苦しんでいる人びとを思いやるということと別ではありません。自然や社会の出来事を、そうした出来事を引き起こしている見えない構造のほうから突きとめようという科学の姿勢と、自分では体験しようのない他人の心の内を思いやろうとする対人関係の態度とは、視点をいったん自分のここという場所から外して、出来事の側に、あるいは他人の側に置くという意味では、じつは同じ性質のものなのです。ほんとうの科学は思いやりのあるものであるはずだ、というのが私の信念です。そしてみなさんにはこのような科学の精神をこそ、大阪大学で身につけてもらいたい、そうして「社会からの厚い信頼」を寄せられる社会人・研究者となってこの大学を巣立って行っていただきたい……。私は心からそう願っています。

最後に、これから大阪という地で学ばれるみなさんに、この大阪大学という学問・研究の場の、他にはない特質についてかんたんにお話ししておきます。

大阪大学は、全国に87ある国立大学法人の一つですが、他の国立大学法人にはない一つの特徴があります。それは、藩校ではなく民間の学問所・私塾を源流としていることです。

大阪大学は、1931年、大阪府下の国立、府立のいくつかの研究・教育機関をネットワークで結ぶというかたちで設立されました。大阪医学校（のちの大阪医科大学）と新設の理

学部とでまず大阪帝国大学として発足し、翌年、大阪工業学校（のちの大阪工業大学）が合流し、さらに戦後、大阪高等学校、浪速高等学校、大阪薬学専門学校などが合流して、新制大阪大学となりました。一昨年は大阪外国語大学とも統合しました。ご存じのように、大阪大学が産業界や一般社会との連携に熱心なのも、大阪大学がそもそもそういうネットワーク型の大学として生成してきた歴史をもつからです。

その大阪大学の原点として位置づけられるのは、天保9年、1838年に開設された適塾です。緒方洪庵が開いたこの私塾からは、幕末から明治維新にかけてこの国を引っばっていた大村益次郎、橋本左内、福沢諭吉らが輩出しました。ここでの医学研究は突出したレベルのもので、25年間で三千人の書生が全国から集まり、「江戸は教えにいくところ、学びに行くところではない」という気概に溢れていました。じっさい、洪庵は、江戸幕府奥医師および西洋学問所頭取となりますが、それが基となって明治に東京大学医学部の前身である東京医学校が設立されました。また、福沢諭吉が江戸に開いた洋学塾がいまの慶應義塾医学部へと連なっています。そしてこの適塾を基礎としてこの大阪に設立されたのが、大阪大学医学部の前身、大阪医学校なのです。歴史的に言えば、適塾はこれら三つの医学部のルーツとして位置づけられるものなのです。

大阪大学にはもう一つ、その精神的源流とされる学問所があります。それは適塾から遡ること114年、享保9年、1724年に開設された懐徳堂です。これはいまでいう「市民大学」の先駆とでもいうべきもので、中井竹山・履軒、富永仲基、山片幡桃ら優れた町人学者を輩出しました。懐徳堂は大阪商人たちが拠出した基金によって運営され、町人が貴賤貧富の区別なく、みずから深い学識と徳とを身につけようと、中国の古典や当時の先端科学を学びました。

懐徳堂が開設された享保年間、近松門左衛門の人形浄瑠璃、井原西鶴やのちの上田秋成の文藝など、市民文化が華やかな時代でもありました。とくに近松のそれは、たんなるエンタテイメントではなく、人間の死や業といった悲劇性を深く描いた重厚なものでした。

この背景には、大坂の地が幕府が直轄する「天領」であったこと、つまり大名がおらず大坂城代をはじめとするたった千人ばかりの幕府役人が管理し、まちの運営は、都市計画・土木工事から経済運営まで、町人から選ばれた総年寄が仕切ったということです。ここ大坂の地では、明治維新にはるか先立って、「市民社会」の構築に取り組みされていたということです。じっさい、学術・文化も「民」が支えました。

この伝統は、明治に入っても引き継がれ、演劇文化はあいかわらず華やかでしたし、朝日や毎日といったジャーナリズムも、さまざまな先進的な産業や金融機関もここで生まれました。大阪帝国大学や大阪外国語学校も、用地や運営資金の一部を民間からの寄付によるなど、民間の大きな支援があっはじめて創立しえました。大阪市のシンボルである中之島の中央公会堂や図書館の建設も、さらには大阪城天守閣の再建も、民間の寄附でなされました。

リベラル、つまり「自由」とふつう訳されている言葉がありますが、辞書をご覧になったら分かるように、リベラルの第一の意味はじつは「気前のよさ」にあります。たっぴりと豊富にある、他者に寛大であるという意味に続いて、ようやく四番目に「自由主義の」という意味が出てきます。リベラルの名詞には二つの語があります。リバティとリベラリティです。そしてこの後者、つまりリベラリティこそ「気前のよさ」ということなのです。

その意味で、大阪はよくいわれるように身分を問わず自由な文化を享受したという点できわめてリベラルな都市であったと同時に、市民が市民生活においてほんとうに大事なことには金惜しみせず寄附するという意味でのリベラリティの空気をずっと育ててきたわけです。そういう輝かしい市民文化の歴史を、みなさんには大阪大学在学中にぜひ学んでほしいと思います。

節約できるところは節約し、大事なところには惜しまず金を出す、そういう合理性にもとづいた市民文化の気概がこのところ浅くなってしまい、大阪人は「けち」であるという風評のほうが強くなっているのは、悲しいことです。大阪がいまいちど、自分たちのまちは自分たちで支えるという、liberty と liberality の精神を取り戻すために、大阪大学がしなければならないことは山ほどあります。それを世界最高水準の学術研究をつうじて果たすのが、いまの大阪大学の使命であるといえます。

みなさんがこれから何度も耳にされることになるはずの大阪大学のモットー「地域に生き世界に伸びる」は、そのような意味で謳われています。この言葉をどうか胸深くで受けとめてください。

大阪大学に入学されたみなさんは、お客さんではなく、ともにこのモットーを実行してゆく仲間です。そういう思いで、みなさんに心から「ウェルカム」という言葉を贈ります。